



TITLE:

学校教育改善ユニット:京都市立高倉小学校における共同授業研究の 取り組み 2011年度

AUTHOR(S):

大下, 卓司

CITATION:

大下, 卓司. 学校教育改善ユニット:京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2011年度. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書 (2007-2011年度): 38-39

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179742>

RIGHT:

京都市立高倉小学校における共同授業研究の取り組み 2011年度

1. 京都市立高倉小学校との連携

教育方法学講座教育方法学分野（以下、教育方法研究室と記す）では、「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」を合言葉に、2003年度から京都市立高倉小学校（以下、高倉小と記す）との共同授業研究、通称「プロジェクトTK」に取り組んでおり、本年度で9年目を迎えた。「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」という合言葉は、「子どもが育つ」という目標に向かって、教師と大学院生が協働して取り組み、その中で成長を目指すものである。本プロジェクトは、教育方法研究の大学院生が研究の主体を担い、同研究室の共同研究の中で重要な位置を占めている。この共同研究を通じて、大学院生は教育方法学者としての力量形成を行っている。2007年度教育実践コラボレーション・センターが設立を迎えて以降、本プロジェクトは、学校改善ユニットに位置づけられてきた。

2. 大学院生の活動

本プロジェクトは、大学院生が高倉小学校の校内研究組織である研究部会に参加して、いわば面と面の関係で研究を進めている。これまで、1年間を大まかな1サイクルとして研究が進められてきた。研究の方法は次に示す通りである。

- ①年度初めの研究部会の定例会において高倉小学校が目指す子ども像を教師と大学院生が議論する中で、研究課題を共有する。
- ②研究部会の教師が校内の教師に公開する研究授業に焦点を当て、授業づくりを行う。研究授業の単元が決まると、教材研究（単元の教科内容、予想されるつまづきとその解決法、学習課題・指導過程の提案など）を行い、指導案作成に大学院生も参加して、事前検討会を行う。
- ③研究授業はもちろん、それにかかわる平素の授業も観察する。ここで、大学院生は授業を観察し記録を取る。授業後に教師と話す、あるいは、授業感想によって授業のフィードバックを行う。
- ④必要に応じて、授業の様子を撮影したビデオ（許可を得て撮影）、大学院生が取った授業記録、子どもたちが書いたワークシートやノートなどをもとに授業を振り返り、研究部会で議論する。なお、こうした記録は研究室で定めた情報共有ルールに則り、プライバシーを配慮している。
- ⑤以上のプロセスを経て臨む研究授業においては、部会の教師や、あるいは他の研究部会の教師とともに、事後検討会に参加し、授業実践の事実に基づいて議論する。その中で、今後の授業を改善する手立てについて教師と共有する。
- ⑥高倉小学校の研究発表会を年間の区切りとして、報告書などに1年間の活動をまとめ、成果と課題を明

らかにして、次年度に引き継ぐ。

以上の研究サイクルをベースとしながら、大学院生の関心や高倉小の研究方針に応じて、各年度で研究の方向性は異なる。そこで、まずは2007年度から2010年度までの取り組みを概観する。



▶図1 授業観察の様子

3. 2007年度～2010年度の取り組み

2007年度は、グループ学習を共同研究のテーマとして設定した。主に算数と理科の授業観察を行いながら、よいグループ学習のあり方を定型化したり、高倉小で行われてきた典型的な授業スタイルにグループ学習がどのように位置づくのかを検証した。

2008年度の共同研究のテーマは、ワークシートであった。子どもの学習を促進させるためには、どのようなワークシートが有効であるのかを、社会・算数・理科の授業観察の記録から一般化することを試みた。

2009年度の研究テーマは、思考力を深める記述指導であった。研究対象を算数に絞り、子どもの記述における思考力の深まりの具体像と、思考を深めるためのワークシートや振り返りの工夫を抽出した。しかし、思考力を効果的に高めるには、思考力を見取れる評価方法を考え出す必要があるという課題が浮かび上がった。思考力は、知識の暗記しか評価できない従来のペーパーテストでは捉えにくいためである。

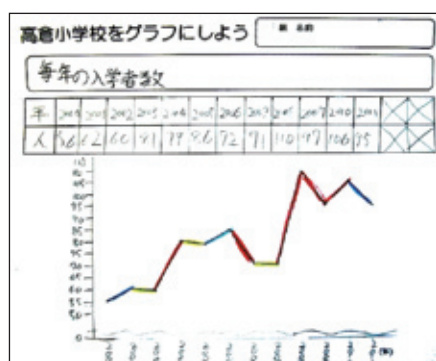
2010年度は、算数科において、パフォーマンス評価の研究をはじめ取り入れた。パフォーマンス評価とは、子どもが知識や技能を活用して、多様なパフォーマンスによって表現することを求める評価方法である。自由記述問題や観察、実技テストなど様々なパフォーマンスが含まれる。具体的には、4年生「面積」の単元において、授業者と院生との共同で、パフォーマンス課題を作成した。学校行事において理科実験をする部屋を決めるために、教室（長方形）と廊下（L字型）のどちらが広いかを調べようという課題である。パフォーマンス課題とは、真正でリアルな文脈において、知識・技能を総合して使いこなすことを求める課題をさす。授業後には、子どもの作品をもとに、授業者を含む高倉小の教師たちと院生で、ループリックを

作成した。ここで、ループリックとは、パフォーマンスの成功のレベルを示す数段階の尺度と、各レベルで期待されているパフォーマンスの特徴から構成される評価基準表である。2010年度は、パフォーマンス評価論を軸に据えた共同授業研究が行われた。

4. 2011年度の取り組み

以上の研究蓄積を踏まえたうえで、2011年度は、2010年度の研究を発展的に引き継ぎ、研究部会の共通のテーマとしてパフォーマンス課題を取り入れた授業づくりが進められた。6月と9月の研究授業に焦点を当てたものの、研究部会の教師全員が一度はパフォーマンス課題を取り入れた授業を考案し、各学年の教師と共同で練り上げてきた。こうして、算数科部会の研究成果を教師全体で共有した。この時、パフォーマンス課題のように正誤による単純な評価が難しい授業では、子どもの作品例や記述例を具体的にイメージすることが必要になる。そこで、本年度は指導案に予備的ループリックを明記した。授業前に子どもの表現を事前にイメージし、記述しておくことで、子どもを次の段階に伸ばすにはどのような手立てが必要なのかを明確になり、指導に生かすことができる。

以上の研究方針の下で、6月と9月の研究授業に焦点化して研究を進めた。そのために、4月に研究部会においてパフォーマンス評価に基づく授業を行うことが確認された。その後、5月の高倉小の全体研究会において、昨年度の事例を交えながら、パフォーマンス課題に関する研修を大学院生が行った。こうしてパフォーマンス課題に関して、高倉小全体で共有を図ったのち、6月に単元「折れ線グラフ」(4年生)において授業研究を行った。ここでは、単元の全体を通じて「高倉小学校をグラフにしよう」という問題場を設定し、同小のさまざまなデータをグラフとして表現し、説明を加えるというパフォーマンス課題が出題された。



▶図2 子どもの作品例

図2に示した子どもの作品は、2000年から2011年にかけて高倉小に入学した子ども数の変化を表している。ここで、緩やかな変化は青い線、ほぼ横ばいは黄色い線、急激な変化は赤い線として表現されている。単に学習した内容をそのまま表現するだけでなく、子どもが自分で考えた工夫を施すことで、視覚的にわかりやす

いグラフとなっており、子どもは学習内容を深く理解していることが読み取れる。

9月には単元「おおきさくらべ」(1年生)の研究授業を行った。ここでは、長さやかさの比較や、時計について学習する。パフォーマンス課題としては「くらべ大王からの挑戦状」という物語の文脈を設定し、「一番短い道を見つけよう」という課題が設定された。ここでは、子どもは直接比較や間接比較(ひも、紙テープ)、個別単位(ブロック、積木)など様々な比べ方で、宝の地図から近道を探した。



▶図3 長さを比較する様子

「パフォーマンス課題」を導入することで、課題に取り組む必然性が生まれる。1年生では、物語の場面を取り入れ、長さを比べる課題に必然性を生み出した結果、子どもたちは意欲的に学習に参加していた。その一方で、この授業実践を通じて、ひもや紙テープに長さを写し取り、しるしをつけて切る、ブロックであれば、並べたのち、個数をメモするなど、学校生活全体の中で培われていくような個々のスキルが未習得であることが多いため、課題を通じて、どのようなスキルが必要とされるのかを具体化し、事前に経験させることが肝要であることが明らかになった。

以上の6月と9月のいずれの授業においても、教育評価論を専門とする教育方法学研究室の教員も授業を見、指導助言を行った。また、この2つの授業に関して、京都大学大学院教育学研究科で行われている演習「教育方法学研究」において、事前検討会と事後検討会を行った。こうした2つの主な研究授業を経て、1月に公開研究会を迎え、質の高い授業が行われた。

5. おわりに

今年度、パフォーマンス課題を取り入れた授業づくりを軸に据えて研究を行った。研究部会全体の取り組みとしてパフォーマンス評価が取り入れられた最初の年度であったため、パフォーマンス評価論について高倉小と十分に共通理解が図れているとはいえない。そのため、今後の課題として継続的に取り組む必要がある。教育実践コラボレーション・センターは本年度で区切りを迎えるものの、研究室の側、高倉小学校の側の双方とも、共同研究を続けていくことに意欲的であり、今後も何らかの形で、共同授業研究を続けていく予定である。

(文責：大下 卓司)